

太平洋人物誌

秋山真之

南洋群島占領の推進者

(一八六八—一九一八)

一 主要経歴

秋山真之は東郷隊の名参謀として、バルチック艦隊を全滅しながら味方の損害は水雷艇三隻という世界海戦史上最高の傑作である日本海海戦の作戦計画を立案した「天才・傑物・哲人」といわれる人物である。

秋山は明治元年(一八六七年)三月二〇日に愛媛県松山市に生まれ、明治二三年には海軍兵学校(一七期)を首席で卒業した。その後、明治二六年にはイギリスで建造された当時の最新鋭巡洋艦吉野を航海士として日本に回航したが、日清戦争では巡洋艦筑紫の航海士として参戦した。

明治三〇年六月にアメリカに留学を命ぜられ、海軍大学校に入学する予定であったが、外国人留学生を受け入れなくなったためマハン大佐(Alfred Thayer Mahan)に師事することになった。また、秋山は米西戦争が起きるとアメリカ艦隊旗艦ニューヨークに乗艦

し、観戦する機会を得たが、この間に秋山が送った観戦報告は問題点の把握、論旨の展開法、戦術眼の深さなど海軍中央部を感嘆させたという。

帰国後の秋山は海軍省軍務局員、常備艦隊参謀などを経て、海軍大学校教官となったが、明治三六年には連合艦隊作戦幕僚となり、日露戦争では東郷艦隊の参謀として参戦した。

秋山の参謀としての要務処理は「知識沸き出る如し」といわれ、その報告や指示は「敵艦見ユトノ警報ニ接シ……」「興國ノ興廃此一戦ニアリ……」「勝ッテ兜ノ緒ヲ締メヨ」など後世に残る名文であった。

日露戦争以後の主要な経歴としては海軍大学校教官、明治四一年に秋津州音羽、明治四二年に橋立、四三年に出雲、続いて伊吹艦長などを歴任し、明治四四年三月には第一艦隊参謀長、大正元年(一九一一年)一月には軍令部第一班長兼海軍大学校教官となり、大正二年一月に少将に昇任すると、

その翌年には海軍大臣八代六郎中将の強い要請により軍務局長に就任した。しかし、この間に中国革命に深入りするなど、政治的行動が多かったため加藤友三郎中将が海相となると、大正五年二月から一〇月まで欧米に出張を命ぜられ、帰国後の大正五年には第二水雷戦隊司令官に補任された。続いて翌年七月には将官会議議員として第一線を追われ、一二月には中将に昇任したが待命とされた。

このように秋山には名参謀、日本海軍の戦術の創設者としての一面と、深い政治的動きという面との二面があるが、特に中国問題では陸軍参謀本部次長田中義一、同第二部長福田雅太郎少将などと密接で、「犬塚信太郎、小池張造等と謀り孫文を助けて第二第三革命を起し、南方政権の支那統一を策し」てもいた。特に、第三革命の時には北方政府の軍艦乗っ取りのため、予備役の下士官を集めて上海に送るなど孫文の革命派を支援した。

このような政治的な動きは、後に原敬に「小策国を誤る挙は、加藤外相時代にも属僚間に行われ居りて、外務の小池、陸軍の福田(田中義一の指揮下に)、海軍の秋山の三人連合して企画し(原敬日誌大正五年七月九日)」と批判もされている。

秋山が支那派遣艦隊の音羽艦長時代に親交があったのが、当時の三井物産

上海支店長の森格(後に東方会議を開催し中国への強硬政策を展開した外務政務次官)や、上海領事の松岡洋右(後に日独伊三国同盟を締結した外務大臣)であったことを考えると、秋山の行動は軍人としての限界を超えたものがあつたのであろう。秋山の更迭人事を当時の軍令部員八角三郎が、「流石は加藤海相」だと称賛していることから、秋山の政治活動が引退を早めたのかもしれない。

また、秋山は神道や仏教(日蓮宗)などの宗教にも関心を持っていたが、特に晩年は大本教とかなり深い関係をもつに至つたといわれている。なお、秋山が病没したのは大正七年二月四日、五一歳という若さであった。

二 南洋群島の占領

第一次世界大戦開戦時に軍務局長であった秋山は、ドイツ領南洋群島の獲得をめぐり強く参戦を働き掛けたといわれている。秋山の参戦への具体的な動きについては不明であるが、閣議が参戦を決した翌八日に、元老の山県有朋を訪問した杉山茂丸が「陸海軍の少壮有力者は勿論、外務省の局長輩をも勧説したるに、大隈首相は大いに彼らの説に賛成し、他の人々も皆な熱心に之に同意せるのみならず、今は却つて自から之を主張するに至れり」と記しているが、この「陸海軍の少壮有力

者」が陸軍は田中義一であり、海軍は秋山軍務局長であった。

また、南洋群島の占領を推進したのも秋山であった。南洋群島の占領に外務省はアメリカの反日感情を憂慮して反対した。これに対して軍令部次長山下源太郎少将と海軍次官鈴木貫太郎少将(終戦時の総理大臣)は「参戦もしていない米が、彼これ言う可き理由はない。もし言えば不当な干渉になる。そのため開戦となるようなことになれば、こちらは非常に敵愾心を生ずる。勝敗は別として米国に戦意がある以上やらねばならぬ」と上司に進言した。

また、さらに外務省の戦争となつた場合には負けるのではないかとの質問に鈴木次官は「三年以内ならば負けはない。向こうは物資があるから長引けばどうなるかは判らぬが」と強硬論を主張していた。



秋山真之・連合艦隊参謀

このように南洋群島の占領は海軍上層部の積極的な意欲に支えられていたのもあったが、秋山は南洋群島を占領すると日本領化を図るために、三井の資金援助で家族を伴う百数十人の労働者をアンガウル島に送った。

一〇月三日に南洋群島占領の議題を閣議に提案し、占領は「差当り一時ノモノトシ、之ヲ以テ永久占領トナスヘキヤ否ヤハ戦後諸問題解決ノ際ヲ俟テ決定スヘキモノトス」と、閣議では一時占領しか認められなかったにかかわらず、一カ月後の十一月一〇日にはパオに着いた移住者代表の西沢吉次が「お互の希望が実現し同慶に堪えない。占領地は軍事以外に我が経済的地歩を固めて置く必要もあり、それに貴官出發時の約束もあるから、民間実業家を勧誘、大いに努めている。(中略)その地に行くから事業上に適宜の便宜を与えて貰いたい」と言う秋山から第二南遣支隊司令官松村龍雄少将へ占領を喜び、占領地永久化を意図した手紙を持参していた。

閣議の一時占領決定から一カ月後には家族を伴う百数十人の労働者を送つた秋山の早業は、政府決定前に既に人集めや船を準備していなければ不可能であり、また、このような経費を海軍が負担するのも困難で、この経費は秋山と親しい芳川寛治を通じて三井物産が出したのであろうか。

その後、日本はイギリスから地中海への艦艇派遣要請を受けると、巡洋艦二隻、駆逐艦一二隻を派出する代償として南洋群島領有の保証を要求し、ベルサイユ講和会議で日本の委任統治を確定した。

三 海軍戦術の創設者

秋山の何よりの功績は創設期の日本海軍の戦術や作戦要務を完成し、図上演習を導入するなど、日本海軍の戦術や作戦要務を理論的に完成したことであらう。

秋山はアメリカに留学しマハンに師事したとはいえ、日本古来の甲州軍学や伊予水軍の兵書などのほかに孫子・呉子などの中国の古兵書、ジョミニ、クラウゼヴィッツなど西欧の兵法を研究したが、特に秋山に影響を与えたのはブルーメの『戦争論』であったといわれている。

しかし、日本海軍の作戦計画は日本古来の戦法である「待ち伏せ」「夜打ち」「追い討ち」などを応用し、特に敵前直角回頭で有名な「T字戦法」は甲州軍学の「車掛り」戦法の応用といわれている。海軍大学の講義は「海軍基本戦術」、「海軍応用戦術」、「艦隊運動程式」としてまとめられたが、これら講義資料は以後長らく日本海軍を律する「海戦要務令」の基本理念となった。

ロンドン海軍軍縮条約に伴う海軍部内の内紛から、予備役に回された山梨勝之進大將は、秋山教官の講義は兵理の上から理論的に戦術を説き「理論整然として胸がすくように筋が通っているうえ、興味津津たるものがあつた。まことにブリリアント、チャールミングで学生の血を沸かせたものがあつた」と回想している。 (平間 洋一)

〔参考文献〕

- 桜井真清編『提督 秋山真之』(岩波書店、昭和九年)
- 桜井真起用『秋山真之』(秋山真之会、昭和八年)
- 水野広徳『噫 秋山海軍中將』(中央公論社、大正七年)
- 島田謹二『アメリカにおける秋山真之』(朝日新聞社、昭和四五年)
- 井出寿『秋山真之のすべて』(新人物往来社、昭和六二年)